

## 研究ノート

## 王維の在家信仰

——維摩經を中心に——

王維にとって善知識であつたとされる母崔氏は、王維が進士に及第した開元七年（七一九年）頃に上京し、大照禪師普寂に師事したと考えられる。普寂は、長安・洛陽兩京の法主と云われ則天武后・中宗・睿宗三帝の門師として名高い大通禪師神秀の高足であり、神龍二年（七〇八年）、神秀が示寂するや中宗の勅命によって師神秀の法衆を統べ始めたこと云う。已に宗教家としての名聲を恣にしていた普寂に師事した母崔氏は、よほど信心深く、師事以前より佛典に親しみ、佛教の素養を身につけていたと思われる。

九歳にして詩文をつづつたと本傳に記されるほど早熟な才能に恵まれていた王維は、普寂に入門する以前の母崔氏から佛教に關する知識を與えられたであろう。母崔氏が王維に語

## 内 田 誠 一

って聞かせたであろう佛教の話が、どのようなものであつたかは俄に定め難いけれども、教養豊かな母崔氏のことであるから、幼少年期の王維に、ドラマティックな大乘佛典の中の解り易い部分を、恰も御伽話のように囁んで含めたことは十分に想像される。王維は中年以後、佛教色の濃い作品を生み出すようになるが、少年期に已に佛教的素養、少なくとも佛教を理解する適性があつたとみるべきであろう。

王維の「摩詰」という字は、名の「維」と合わせて「維摩詰」となることを前提に付けられたことは疑念を挟む餘地が無い。では、「摩詰」という字を何時付けたのか、又、名付け親は誰であるのだろうか。次に、王維を取り巻く幾つかの

狀況證據を踏まえながら、字を付けるに當つての考えられ得る經緯に就いて論じてみることにする。

まず、幾つかの狀況證據を整理しておきたい。

①母崔氏は普寂の俗弟子であつたこと。<sup>(5)</sup>

②普寂は王氏と同郷であること。<sup>(6)</sup>

③王維が寵愛を受けた岐王範は、普寂の師神秀の俗弟子であり、<sup>(7)</sup>神秀示寂にあたり碑文を書いていること。<sup>(8)</sup>

以上の狀況證據から、次のような想像ができれば、普寂と王氏が同郷であること<sup>(2)</sup>から、王氏一族には普寂と面識のある人がいたと考えるのが自然であり、王氏の嫡男である維が上京する際には、舊中國の習慣として同郷の普寂への表敬訪問を命じていた可能性が高い。そして王維が、詩書畫音樂に優れた美貌の天才少年であり、しかも、多くの人々に愛されやすい性格だったという點から考えれば、訪問を受けた普寂が喜んで己が師の壇越であつた岐王範に<sup>(3)</sup>王維を紹介した可能性も十分に認められよう。又、母崔氏が普寂に入門するに當つても、婚家である王氏一族から推薦を受けていた可能性が大で、王維自身も母の縁で<sup>(1)</sup>、普寂の説法を聴聞する機会が多かつたと考えられる。

王維の生れた則天武后の時代は、佛教を國政に利用しようとする爲政者と、爲政者・權力者を利用して勢力を擴大しようとする佛僧との利害が一致した國家佛教の時代であつた。<sup>(10)</sup>武后死去の後も、この傾向はそれほど變わらなかつたようであり、<sup>(11)</sup>王維上京時も、佛僧と王侯との關係は密であつたと考えられる。当時の佛教信仰が、現世利益中心の功利主義に徹してはいなかつたにしても、佛僧を官界へのツテと見做したり、佛教信仰を立身出世のパスポートとして利用することはあつたであらう。又、かかる裏工作や處世が当然と考えられる時代であつたに違ひない。王維は、名門太原王氏の流れを直接くむ河東王氏の嫡男であり、母も名家崔氏の出、という門地家柄を持つ。<sup>(12)</sup>加えて、豊かな天分に恵まれた身であつてみれば、その佛教知識や才藝を十二分に驅使して、貴顯のサロンに颯爽と登場してきたことは不思議ではない。一方、母崔氏としても、河東王氏の総領にふさわしい王維の出世榮達を誰よりも願つていたであらうから、岐王範とつながりのあつたと考えられる師普寂には、王維の處世に就いて当然相談もしていたであらう。

王維の字が『維摩經』をふまえていることは疑いない。と

すれば、王維は少なくとも元服の二十歳の時點までには、『維摩經』を直接讀んでいたか、或いは、その中の二、三のストーリーを母崔氏から聞かされていたことになる。では何故母崔氏から聞かされた經典が他ならぬ『維摩經』であつたのか。

『維摩經』が大乘佛典の中でも重要な位置を占めていることは否定できないが、『法華經』『華嚴經』『楞伽經』『金剛經』等も、『維摩經』に劣らず重要視されたのである。唐代に於ては、講席で開講論議され、或いは諷誦僧によつて誦經された經典は、『法華經』『金剛經』がほとんどであつた。<sup>(13)</sup> 故に『法華經』『金剛經』でなくて、『維摩經』であつたのだろうか。字を「摩詰」としたことから判斷すれば、『維摩經』は母崔氏と王維にとつて、何か重大な意義を持つものでなくてはならない筈である。

周知の如く、『維摩經』は、維摩詰居士という在俗の佛教信者を主人公として、不二思想に立脚した菩薩行を説く經典である。つまり、菩薩（大乘の修行者）としてのあるべき姿（理想像）を描き出そうとしているものと言つてよい。

「爾時、毘耶離大城中、有長者、名維摩詰。已曾供養無

量諸佛、深植善本、得無生忍、辯才無礙。……久於佛道、心已純淑、決定大乘。……資財無量、攝諸貧民。奉戒清淨、攝諸毀禁。……雖處居家、不著三界。……雖明世典、常樂佛法。……雖獲俗利、不以喜悅。……入治政法、救護一切。」  
（『維摩經』方便品）<sup>(14)</sup>

維摩詰は、世俗にあって戒律を守り、貧民を助け、佛法に歸依精進して、法律や政治に携わつて人々を救護する資産家である。

母崔氏は、王維を佛教に歸依させようと願っていたに違いない。そして又、官僚としての成功をも、当然熱望していたことだろう。それ故に、こうした維摩詰を、我が子王維の生涯の目標、究極の指針としようと考へていたのではあるまいか。そして河東王氏の総領たる王維に對するエリート教育の一環として、特に意圖的に『維摩經』を教授したのではないかと思われる。では、生涯の目標が舍利弗や羅睺羅ではなく維摩詰であつた理由は何か。この點に就いては、①菩薩は、上求菩提・下化衆生の實踐者である、②『維摩經』は、出家の無功德を説き、菩薩が在俗であることを否定しない。<sup>(15)</sup> ③従つて官僚とし

て社會的成功を目差すことと何ら舐觸しない——という維摩詰及び『維摩經』の獨自の條件を指摘すべきであらう。

王維は、おそらく二十歳を迎えた時、母崔氏の勧めに従つて字を「摩詰」とした。或いは、普寂ないし岐王の發案によつてこの字を付けたと考えられる。「摩詰」などという大それた字は、華やかな都長安のサロンでも大いに人々の關心をひいたであらう。しかし、王維が維摩詰に對する共鳴や憧憬の念をこの時已に發していたにしても、王維自らが字を「摩詰」と定め、大乘菩薩道の實踐者を以て任じた、ということころまでは考えにくい。<sup>(17)</sup>なぜなら、この頃の王維にとって、佛教はまだむしろ、讀書人としての知識・教養の段階に過ぎなかったと思われるからである。原注に製作年齢が記されている十五歳から二十一歳までの作品十首を見ても、佛教的色彩を感得できるものは殆ど無い。さらに濟州時代（二十一歳～二十七歳頃）の作品を見ても、「魚山神女祀歌」のような民間信仰を詠うものはあつても、佛教的色彩はやはり見出し難いのである。

王維が内發的に佛教に歸依するには、幾度かの精神的挫折と、今少しの歲月とを必要としたと見るべきであらう。

王維の在家信仰（内田）

〔注〕

- (1) 入谷仙介著『王維研究』（創文社、一九七六年）二三頁。
- (2) 鎌田茂雄著『中國の禪』（講談社學術文庫、一九八〇年）參照。
- (3) 「及神秀卒、天下好釋氏者咸師事之。中宗聞其高年、特下制令普寂代神秀統其法衆。」（『舊唐書』卷一九一、普寂傳）
- (4) 「王維字摩詰、九歲知屬辭、與弟縉齊名、資孝友。」（『新唐書』卷二〇二、王維傳）
- (5) 王維「請施莊爲寺表」（趙本、卷一七）に、「臣亡母故博陵縣君崔氏、師事大照禪師、三十餘歲。」と記される。
- (6) 注（3）所掲の「普寂傳」に、「普寂姓馮氏、蒲州河東人也。」とある。
- (7) 山崎宏著『隋唐佛教史の研究』（法藏館、一九七五年）、第十章「荊州玉泉寺神秀禪師、三、神秀の信者」參照。
- (8) 「神秀以神龍二年卒、士庶皆來送葬。……岐王範、張說及徵士盧鴻一皆爲其碑文。」（『舊唐書』卷一九一、神秀傳）
- (9) これらの狀況證據をもとにして次のような師弟關係圖が作製できる。

五祖弘忍——大通神秀——大照普寂——道瑤

岐王範——崔氏——王維

（俗弟子）

（俗弟子）

(10) 鎌田茂雄「中唐の佛教の變動と國家權力」（『東洋文化研究所紀要』第二五冊、創立二十周年記念論集Ⅰ、一九六一年

一月) 參照。

(11) 注(10) 所掲の論文では、中宗が天下の諸州に「大唐中興」と名づけられた佛寺と道觀を置き、玄宗が『金剛經』を注釋して天下に流布したり、不空三藏や一行を重任したことを擧げて、佛教教團が國家權力によって統制され、佛教寺院の中央集權化が確立してきたことを指摘する。また、初唐から中唐にかけて勢力を振った佛教は、國家權力に迎合し、それを利用した宗派であると云う。

(12) 伊藤正文著『中國の詩人⑤、王維』(集英社、一九八三年)の「二、青春」に詳しい。王維の生家を「封建中國に無數に存在した、田舎まわりの小官吏の一族」、「下級士族」と考える入谷説(注(1) 所掲『王維研究』)は必ずしも妥當ではない。

(13) 注(7) 所掲書、第十四章「報應信仰」參照。

(14) 羅什譯『維摩詰所說經』(『大正新脩大藏經』、一四卷)。但し、句讀は筆者に據る。

(15) 注(14) 所掲の『維摩詰所說經』の弟子品で、維摩詰が羅睺羅に對して次のように説く。「不應說出家功德之利。所以者何。無利無功德是爲出家。有爲法者、可說有利有功德。夫出家者、爲無爲法。無爲法中、無利無功德。」又、長者の子に對しては、「汝等便發阿耨多羅三藐三菩提心、是即出家。」と説く。

(16) 「男子二十、冠而字。」(『禮記』曲禮上)

(17) 注(12) 所掲書、二四頁に類似的指摘がある。